



特別企画

気鋭のドクター4名が語る 最先端の医療



青木 幸昌

Yukimasa Aoki
医療法人社団 愈光会
Clinic C4 院長

30年近くがん治療に携わり1万例以上の臨床経験を有する。モットーは、説明と選択の医療、人事を尽くすがん医療。

▶ P214 最先端の放射線治療 トモセラピー



齋藤 糧三

Ryozo Saito
日本機能性医学研究所 所長

機能性医学に基づいた次世代のヘルスケアを提唱。ビタミンDを用いた花粉症治療における日本の第一人者。日本ファンクショナルダイエット協会副理事長。

▶ P216 腸内フローラとライフスタイル医学(機能性医学)



中原 悦夫

Etsuo Nakahara
医療法人社団 協立歯科 クリニックテュボワ理事長
日本歯科大学客員教授
神奈川歯科大学客員教授

日本歯科大学を卒業。アメリカ美容歯科学会より日本人初の認定医を受け、審美と予防の概念を結びつけた先制医療の普及に務める。

▶ P218 治療しない先制歯科医療とは



星野 泰三

Taizo Hoshino
ブルミエールクリニック 院長

再生医療法に準拠した研究所を駆使するとともに、海外新薬も積極的に導入した力強いがん治療を展開する。

▶ P220 登場「ニボルマブ」がん治療の大転換
— 表舞台に立った免疫新薬 —



治療しない先制歯科医療とは

中原 悦夫

医療法人社団 協立歯科 クリニックデュボワ理事長、日本歯科大学客員教授、神奈川歯科大学客員教授

「お母さんのお腹の中にいる時からまじめに通っているお子さんは、みんな20歳を過ぎても虫歯は一本もなく、もちろん歯周病や不正咬合もありません。」これまでの常識を覆す嘘のような話ですが、本当の話です。彼らは歯医者さんで虫歯や歯周病の治療は人生で一度も経験していません。

虫歯への先制：胎児の時から通うという事は、妊婦の口腔ケアが小児期の予防には最も重要だということです。母親の口腔内の細菌は1歳を過ぎた頃から4歳くらいまでの間に食べ物の口移しや箸やスプーンなどの使い回しによって、子供に感染するので、出産前に母親の口腔内の細菌を抑制しておくことが虫歯の最も根源的な予防方法なのです。

唾液には再石灰化によって虫歯を自然治癒させる能力もあります。しかし、同時に虫歯の原因菌も唾液中に含んでいるのです。従って、間食の少ない食生活と細菌のコントロールで、その効果の発現を最大限に維持していれば、“虫歯や歯周病は発症させるほうが難しい”のです。

歯周病への先制：歯周病の原因菌は、18歳頃から感染しはじめます。そして成人になるとほとんどの方が歯周病の保菌者になってしまい、一度感染すると生涯除菌をすることができないため、口腔内常在菌になってしまうのです。

歯周病菌は歯周病の原因にとどまらず、心内膜炎、糖尿病、肺炎、脳血栓、低体重児出産の原因に、そして一部の虫歯の原因菌は中耳炎や脳出血の原因にもなっていることがわかっています。また口腔は消化器の一部ですので、口腔内の歯や歯肉の健康状態と胃腸の健康状態と関わりがあるのは当然のことです。

歯周病菌の主な栄養源は鉄です。つまり歯の周りから出血があるとヘモグロビンの鉄を吸収して歯周病菌は非常に活動的になります。普段は痛みも腫れもなくとも、歯磨き等で血がにじむだけでも歯周病菌の活動は活発になっていきます。一度感染してしまったら生涯除菌できない歯周病菌に対しては、先制的に手を打ちながら発症させないことが予防の要になります。つまり歯の自然治癒能力や歯肉や身体の免疫力を健全な状態で維持することが大切なのです。

そのもっとも基本的な事は日々の食事で“何を食べているか”ということにつき

ます。分子レベルで栄養状態を血液で解析する分子栄養療法は、歯肉の細胞膜の修復機能を高めたり、コラーゲンを増やして歯肉を強化したりするだけでなく、全身のあらゆる疾患の予防にも繋がります。分子レベルでの栄養バランスを理解すると普段の食事を見直すきっかけにもなります。

また、免疫力自体を高め、細菌の侵入を防いだり、がん細胞自体の増殖を防いだりするためのβグルカンのような免疫賦活剤も歯肉のみならず全身の健康を高レベルで維持することが可能になります。

虫歯と歯周病の予防は細菌のコントロールが一般的ですが、血液検査によるもう一步踏み込んだ栄養学的コントロールによる先制医療が細菌に対する抵抗力を強化するだけではなく、細胞一つ一つの機能を高め、全身の疾患に対する予防効果が増強されるのです。

歯軋りや喰いしばり、そして加齢への先制：もう一つの口腔内の問題として、最近多くの方が抱えている“歯ぎしりや喰いしばりによる歯や歯肉へのダメージ”があります。健康な歯や被せたばかりのセラミックが欠けたり、すり減ったり、割れたり、あるいは顎関節症になったりすることもあります。習慣的におこなっている場合、慢性的な肩こりや偏頭痛、あるいは筋肉痛を引き起こしています。

これらも血液データを解析すると、血糖値の調整がうまくできていない傾向がある人に発現している傾向が高いことがわかってきました。つまり、食生活上の糖質の摂り方が歯ぎしりやくいしばりに影響していることがあるのです。また、食後3時間以内に就寝することによる胃の内容物の食道への逆流によっても歯ぎしりやくいしばりが喚起され、それによって唾液腺が刺激されることで唾液が放出され、それを飲み込んで中和されることで食道粘膜を守ろうとしているということもわかってきています。口や顔は進化医学的に見ると消化器の最先端突出部位ですので、胃腸が無意識のうちに活動しているのと同様に、睡眠中に無意識に歯ぎしりや喰いしばりが起こるのも生理現象として理解できると思います。しかし、生理現象とはいえ、歯や歯肉、筋肉痛や肩こりなどの不定愁訴は精神的な症状へと転化し兼ねない苦痛を伴います。

これらへの対処は、低周波レーザー併用による顎顔頸部筋肉を一つ一つ伸ばしていくマイクロストレッチや筋肉を動かすメカニズムに作用させて筋肉自体をリラックスさせることで筋肉量を軽減させるボトックス療法、全身の筋肉をストレッチさせると同時に体幹を支えるインナーマッスルを鍛えるジャイロトニックなどが有効です。

口腔領域の疾患を先制的に抑えるということは脳や心臓あるいは内臓全般の働きを守り、生活習慣病などの全身疾患をも抑える先制医療そのものなのです。